

高野山調査報告

遠藤 廣 昭

はじめに

『福生市史資料』中世・寺社編纂の過程で行なわれた、市内の寺院悉皆調査は、各寺院の御好意により、多数の史料を調査させて頂く事ができ、その成果はすでに市史に掲載されている。

そのなかで、熊川の真福寺旧本堂調査のうちに発見された永祿八年（一五六五）六月一日付けの北条氏照印判状写（中世編14号文書）と、それと一綴りになっていた年末詳四月二一日の慈眼院隆寛書状（寺社編11号文書）は、検討の余地は残してはいるが、中世の半沢覚円坊と高野山、近世多摩と高野山の関係を語る史料として重要であった（なお、この二史料については、久保田昌希中世編集専門委員が『戦国史研究』第一三号に―新発見の「北条氏照印判状

写」に思う―として考察を加えられている）。これは、これまで余り視点に入れられなかった多摩地域と高野山との関係を、今一度考え直さねばならぬことを私達に示唆する史料でもあった。また、このことにより、高野山に覚円坊や多摩修験の史料がねむっている可能性も出てきたのであった。

ここに高野山調査の運びとなった理由が存在したのである。

一 調査概要

ここでは、二回にわたって実施された高野山調査の概要を簡単に報告させていただきたい。

第一回調査 昭和六一年八月三日～四日

拝登。北室院を宿坊と定めた私たちは、当院住職の計ら

いなどにより、高野山大学の日野西真定氏にお会いする機会を得た。ここで、北条氏照印判状写に付いて御教示を得たのである。

氏照印判状写の中で、どのように読んでよいかについて意見の分かれた文字があった。私たちはこれを「就高野」と読むのが妥当（『市史』では「鷲野」とした）かと考えたのであるが、日野西氏は「高野」を「鷹野」と書くことがあるので、「鷹」と「鷲」を混同し単純に書き間違ったものではないか、といわれたのである。高野山について長く研究されている日野西氏の御教示でもあり、大変参考になった。

また、同印判状写にみえる「往生院谷之内 峯之坊」は慈眼院であること、この慈眼院は現在は廃寺となり高室院に併合されていること、さらに、慈眼院の史料が高室院に多数保存されていることなどをお教えいただいたのである。そこで私たちは高野山内の史料を収集している高野山大学内の密教文化研究所に赴き、研究所が目録化を進めている山内宿坊の史料調査カードを拝見させていただいたのである。調査は途中ということであったが、研究所の一室には膨大な調査カードが保存されていた。この中の高室院文書カードから、慈眼院関係の史料調査カードをコピーさせていただいたのである。

「次は現史料を調査する必要がある」私たちは次回の調

査の必要性を強く感じながら、短い調査日程を終えたのである。

第二回調査 昭和六二年一月一六日～一八日

拝登。高室院に宿をとる。天正一八年（一五九〇）豊臣秀吉に敗れた北条氏直は、小田原開城後、ここ高野山高室院に閉居した。まさに因縁の場所でもある。

まず住職にお会いした私たちは、今回の調査の趣旨を説明し協力をお願いした。住職は私たちを院内の倉に案内してくれた。倉の二階に上がった私たちは史料の多さに啞然とした。それは何畳あったであろうか、ただ広いというイメージしか今では残っていない倉の二階に、びっしりと隙間なく史料が、それも整然と並べられているのである。箱のなかに整理されているもの、そのままの状態でただ積み上げられているもの、その場合は今でも目に焼き付いてはなれない。

私たちは史料の選定を急いだ。まず前回の調査でコピーしたカードにより慈眼院関係の史料を集めた。さらにそれ以外何があるか分からないので、全ての史料に目を通すことを心掛けた。そして選定した史料を、これまたご好意により宿の部屋まで運び写真撮影させていただく許可を得たのである。

撮影は、少しでも多くの関係史料を福生市に持ち帰ろうと、夜中まで続いた。しかし、撮影できた史料は「登山

帳」「檀那帳」などの諸記録三四点と、近世の北条関係史料一二点、フィルムにして八九本であった。

正味二日の調査日程は余りに短すぎた。史料の大方は再び倉のなかにねむることになったのである。

二 若干の考察

このたびの調査では、中世における半沢覚円坊と高野山峯之坊（慈眼院）との関係を示す史料は発見できなかった。しかし、武蔵国多西郡の檀那場をめぐって繰広げられた慈眼院と高室院・大乘院の争論の結果を示す史料とも言うべき「登山帳」「檀那帳」を入手できたことは、近世の多摩地域と高野山との関係を考察するうえにおいて大きな成果であった。

そこでこれらの史料を、慈眼院隆寛書状との関わりのおいて若干考察を加えてみたい。

まず二つの史料を紹介したい。

(一) 「相州両国檀那帳」 これは慈眼院の相模・武蔵両国の檀那を記載したものである。第一から第四の四分冊になつており、第一と第二は相模国の檀那帳である(但し、第一冊目の一部が武蔵国の檀那が記載されている)。第三と第四が武蔵国の檀那帳である。年記は第四冊目に文化元年(一一八〇四)五月とある。またその表書から慈眼院役僧妙珠院が記載したものであることが分かる。

次に、その記載内容を知るために、熊川村の部分を抜粋した。

熊川村

横沢門中
宿又

真福寺

名主

野嶋源助殿

組下四拾軒

組頭式人

名主

森田金左衛門殿

組下五四軒

組頭三人

禪

福生院

〃

千手院

名主

石川源右衛門殿

組下五拾軒

組頭三人

村中ノ百四拾四軒月番へ札頼置候人足并馬老入申受候
このように檀那帳には、慈眼院檀那の村名・檀那廻りの
時の宿・名主名・組頭の人数・寺院名・軒数などが記載さ
れているのである。

そして、この二冊の武蔵国の檀那帳には、現在の行政区
画で言うところ、松原村・五日市町・日の出町・八王子市・秋
川市・日野市・多摩市・稲城市・町田市のほぼ全村と、福

生市・昭島市・府中市・国立市・川崎市の一部の村、合せて二七〇ヶ村が記載されているのである。

これはとりもなおさず、慈眼院隆寛書状の中で、隆寛が慈眼院の檀那帳であると主張した、武蔵国多西郡域とほぼ一致するのである。

また、檀那帳の第一冊目に、相模国の檀那帳の他に、武蔵国橘樹郡の鶴見村以下一〇ヶ村の村名の記載があるが、その内三ヶ村の村名の下に「高室院交」とある。これは、これらの村々が高室院との入り交じりの村であることを表わすものである。しかし、さきに述べた村々にはこのような記載はなく、全ての村が慈眼院の檀那であった事が分かるのである。

(一) 「上州両国村名帳」 表書に「宿坊大乘院」とあるが年記はない。また、「村名帳」とあるが、ここに記載された村々は、大乘院の両国における檀那場であることは間違いないであろう。大乘院は慈眼院隆寛書状から「旦那帳」を根拠にして、多西郡の檀那場を慈眼院と争ったことが知れる。この「村名帳」は争論の根拠にされた「旦那帳」ではないが、その後の大乘院の檀那場を教えてくれる史料である。

武蔵国では多摩郡三七ヶ村・豊島郡二七ヶ村・荏原郡一二ヶ村・橘郡五ヶ村の村名が記載されている。このうち多摩郡の村々は、ほぼ野方領（現在の杉並区・練馬区近隣）

に分布していることが分かるのである。

こうして、これらの史料を概観してみると、少なくとも江戸時代後期の慈眼院の武蔵国における檀那場は、高室院や大乘院と争論をおこなながらも、慈眼院隆寛書状にあるごとく「多西郡不残当院之旦那旨候」の言い分が認められていたことが分かるのである。

以上簡単ではあるが高野山の調査報告をさせていただいた。この調査にあたり、ご協力頂いた高野山大学密教文化研究所・日野西真定氏・高室院住職齋藤天譽氏にはこの場をかりて感謝申し上げるしだいである。

(えんどう・ひろあき 福生市史中世調査員 太田区在住)